紀　　要

第 11 号

目　　次

序

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（瀬　口　眞　司）
－地域の検討１．湖東北部地域－

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（小　島　孝　修）
－地域の検討２．湖東南部地域－

櫛の造形　－縄文時代の竪櫛－……（中　川　正　人）

滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描……（田井中　洋　介）

今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例……（横　田　洋　三）

古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域……（細　川　修　平）

長浜市石田町所在の石棺について……（北　原　　治）

観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例……（辻川哲朗・山中　繁）
－蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査－

蒲生郡の渡来氏族とその文化……（大　橋　信　彌）

草津市笠山古窯出土遺物の紹介（続）……（畑　中　英　二）
－窯詰めの方法の復元について－

森瓦窯再考　－「田原道をめぐる二つの地域」補遺－……（重　岡　　卓）

近江式装飾文よりみた小形板碑の年代……（兼　康　保　明）

１９９８．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き

－地域の検討２．湖東南部地域－

小　島　孝　修

１．はじめに

滋賀県は日本のほぼ真ん中にあり、西と東の境界点の一つとなっている。その中央に琵琶湖という日本最大の湖をかかえていることもあって、近江の地は交通の要衝として古くから機能してきた。本稿で検討の対象としている近江の縄文時代については、近年の調査例の増加に伴って資料数も増大し、数々の問題点について論じられるようになってきている。

私自身の問題意識としては、これまで興味を持って取り組んできた縄文時代研究について、近江という新たなフィールドにおいて進めていき、その東と西の交点という地理的特性に関わる問題について考察していきたいという面がまずある。さらには、実学には比較的なりにくい考古学という歴史学の一分野において、どれだけのものを成果とすることができ、なおかつそれをどのように一般社会に還元できるのかという面がある。歴史学とは過去の人類の営みを研究することにより、我々が現在位置する立場を見定め、さらに今後進むべき方向性を模索する学問だと考えるが、それを実社会にどのように反映すべきであるのか、筆者自身はいまだこの問題について明確な答えを持ち合わせておらず、今後の研究のなかで答えを出していきたいと考えている。

こういった点を踏まえ、同僚の瀬口眞司氏とともに、共同研究として「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き」をおこない、この『紀要』誌上においてその成果を公表することとした。近江を地域ごとに分けて各地域の縄文遺跡を俯瞰する作業をおこない、今後に向けての検討課題を抽出していくことに、この共同研究は目的を置いている。したがって論じる内容には推測も多く含まれ、虚構ととられる向きもあるかもしれない。しかしこういった作業は、数年先に「近江全体の縄文時代」を論じることを見据えており、決して無意味ではないと考えている。

本稿ではその一環として、湖東南部地域の検討を行なう。本地域はほぼ蒲生・神崎郡域にあたり、能登川町正楽寺遺跡や安土町上出Ａ遺跡など、近江を代表する縄文遺跡が多く所在し、その内容は県内の他地域と比較しても充実している。まずその地勢などを考えながら、縄文遺跡を群構成し、その画期・段階を求め、それらの背景・要因について考察していく。本稿は、多少なりとも縄文時代の遺物が出土している遺跡を検討の対象としている。一点の土器でも、出土しているという事実を重視するならば、看過することはできないと考えるからである。

２．事象の整理

Ａ．地理的条件

湖東南部地域は、近江八幡市・八日市市・安土町・竜王町・蒲生町・日野町（以上４町は蒲生郡）・五個荘町・能登川町・永源寺町（以上３町は神崎郡）の、２市７町で構成される。面積は約580㎢と広大だが、その東側の多くは鈴鹿山脈を形成する山地となっている。また近世においては、全国に展開した近江商人発祥の地として有名である。

東は鈴鹿山脈を境に三重県に接し、西は琵琶湖に区切られ、北はほぼ愛知川で愛知郡に接し、南は日野川と御在所山～鏡山丘陵により野洲郡・甲賀郡と接している。鈴鹿山脈の西部は主に古秩父古生層の粘板岩・砂岩・石灰岩及び花崗岩といった風化を受けやすい基盤岩石によって構成されており、これらの土砂は愛知川などの河川によって運ばれ、扇状地・氾濫平野・三角州が展開する湖東平野を形成している。以下、まず南側から主要河川ごとに地形を概観したい。

日野川は鈴鹿山脈の綿向山を水源とするが、上流山間部は急峻な地形で、しかも極地的豪雨地帯である。流域面積は218.9㎢と広いが、流域の平均高度は180mであり、また傾斜分布もほとんどが30°以下である。さらに山地河道が短く、流域の大部分が未固結の古琵琶湖層群からなる丘陵地となっている

ため、下流部に顕著な扇状地が発達しない[1]。竜王町より下流部は堆積作用による天井川を形成しており、洪水に見舞われることも度々であった。現在の近江八幡市周辺は慶安2年書上などに洪水記録が残されており、また明治期に入っても4回堤防が決壊している。その対策として、現在では上流部に日野川ダムが建設されている。さらに日野丘陵周辺では、河岸段丘がよく発達している。

日野川には多くの支流が流れ込むが、その一つである佐久良川は、日野町北部の佐久良谷をへて、蒲生町宮井で日野川に合流する。源流は鈴鹿山系の竜王山で、川岸には低位段丘を形成している。発掘による流木調査により、古代においては日野川と合流せず、雪野山丘陵北側を流れ、近江八幡市域で現白鳥川に流入していたともされている。

蛇砂川は、永源寺町井の谷川を源流とし愛知川左岸を西流、蒲生野を縦断して西の湖に流入する。大部分は愛知川の低位段丘面上を緩い勾配で流れ、近江八幡市御所内町で山本川と合流する。八日市市域では天井川化している部分が多く、平時は水流をみないが豪雨時にはしばしば氾濫して水害を引き起こしてきた。その流路は4回も鉤型に屈曲し、地形的に人工の強く加わった河川と思われ、古代蒲生野における灌漑や運河の機能が推定される。幾度か流路を変えたことも、旧流路から推測されている。

愛知川は御池岳や御在所岳を水源とし、永源寺町山上から山地を離れて巨大な扇状地を下刻しながら流れる、湖東地方最大の流水量を誇る河川である。中流域では伏流が激しく平時にはほとんど水が流れないが、標高100～110m付近に湧水帯が形成され、それより下流域では沖積平野を形成する。また八日市面と呼ばれる低位段球面が形成された時代（約1.5～2.5万年前）には、谷口から布引山丘陵に沿って左(南)岸をまっすぐ近江八幡方面へ流れていた[2]と考えられている。

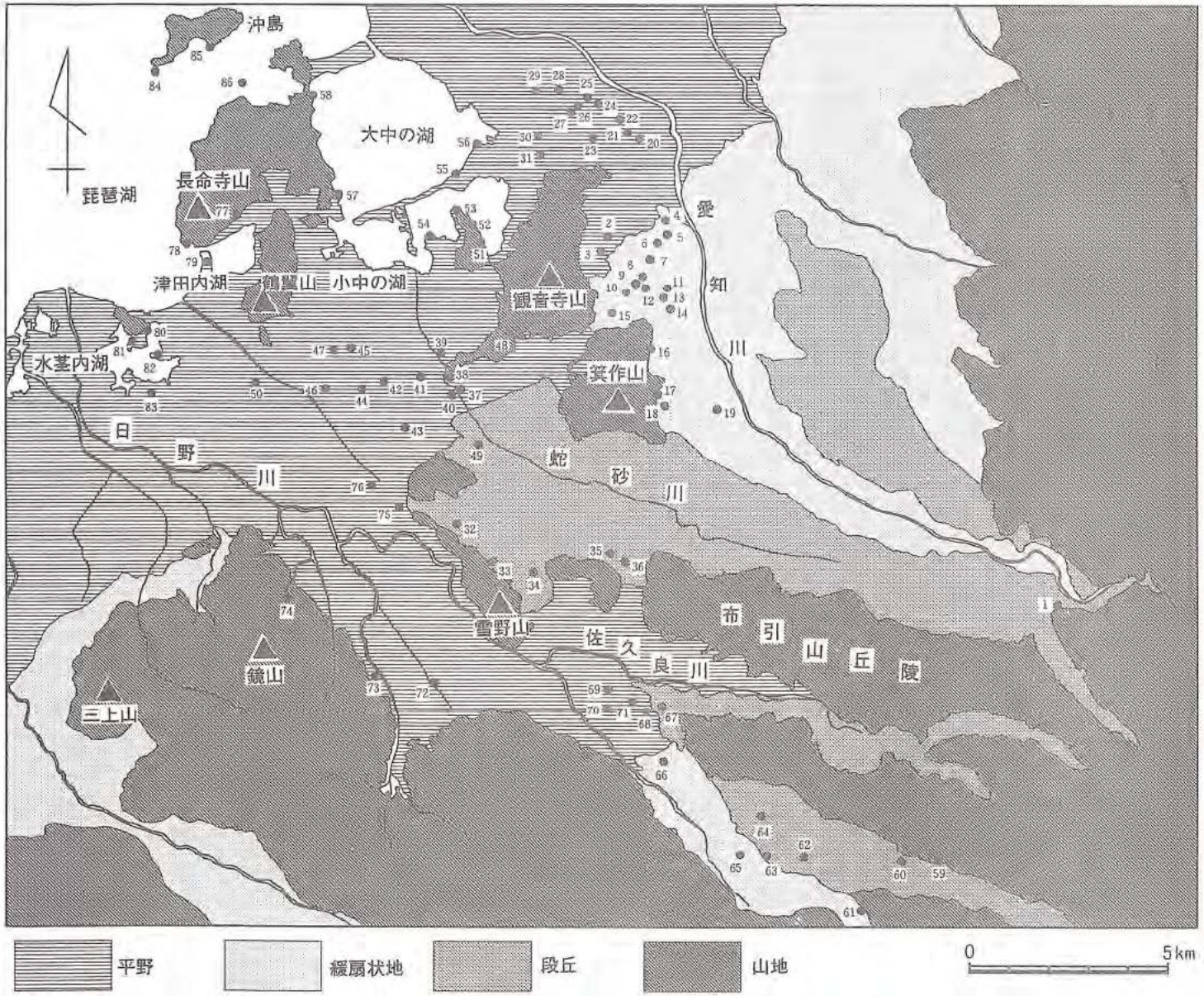
以上みてきたように主に湖東平野を形成してきた日野川と愛知川では、その性格が大きく異なっており、それは土地条件図が示すように、布引山丘陵を境に形成される地形に大きな違いとなって現れている。愛知川は渇水期には水がなく出水期には水があふれる「尻無川」であり、上流から運んだ土砂により広大な扇状地を形成している。一方の日野川は扇状地を形成することが少なく、かなり上流の蒲生町まで氾濫平野を形成しており、また流域では最近まで洪水に悩まされていて、その堆積物により多くの部分が天井川化している。ただ蛇砂川も含めたこれらの河川の特徴から、湖東南部地域は平時には水量が少ないが雨季等には水が溢れ出す、水利には悩む地域であることはいえよう。

このほかにも、当地域を考えるうえで内湖の存在も忘れてはならない。湖東南部地域には、北から大中の湖・小中の湖、津田内湖、水茎内湖がかつて存在していたが、現在はそのほとんどが戦後の食糧難の時代から干拓され、農地化されている。特に大中の湖は琵琶湖最大の内湖であり、面積は約15.4㎢を数え、水深は最深部でも270㎝程度のほぼ平坦な土地であった。その北は砂州により外湖と隔てられ、直径4㎞ほどのほぼ円形を呈していた。大中の湖の南方には中州に隔てられて伊庭内湖・安土内湖・西の湖（これら3湖を合わせて小中の湖ともいう）があり、前二者のほとんども現在は陸地化している。

またこれらの内湖を形成せしめた要因の一つとして、箕作山や雪野山などの独立山塊の存在が挙げられる。これらの独立山塊は、中生代末期の火山活動で生じた断層によって形成されたもので、溶結凝灰岩と花崗斑岩・石英斑岩などの湖東流紋岩類と、これに貫入した花崗岩からなっている。愛知川などはこれらの独立山塊によって流路の変更を余儀なくされ、特に大中の湖は繖山丘陵が背後にあることにより、愛知川の激しい沖積化をまぬがれたことが、形成の大きな要因として考えられる。またこれらの独立山塊の鈴鹿山脈側には伏流水が塞き止められて後背湿地を形成しており、後述するように縄文遺跡立地の要因にもなっている。

B．遺跡群の内容と消長

蒲生･神崎地域の縄文遺跡は、管見の限りで86遺跡（近江八幡市25、八日市市8、安土町5、竜王町3、蒲生町6、日野町7、永源寺町1、五個荘町15、能登川町16）を数えた。これは現在発見されている数であって、市町村ごとの発掘件数の違いや、また踏査の度合いにより未だ発見されていない縄文遺跡も多いことと思われる。だが今回はこれを用いて、



1 A群：1
1 B群：2～19
1 C群：20～31
2 A群：32～36
2 B群：37～47
2 C群：51～58
3 A群：59～65
3 B群：66～71
3 C群：72・73
3 D群：75・76
3 E群：77～83
4 群：84～86

第1図　湖東南部地域に置ける遺跡の分布

No.	遺跡名	所在地	立地	群	概要	文献
1	上出	永源寺町山上	中段	1 A	石刀・石斧(歳苗神社蔵)	36
2	善覚寺	五個荘町金堂	氾濫	1 B	湿地に立地。[S57]晩期土器(詳細不明)。	60
3	録田	五個荘町金堂	氾濫	1 B	湿地に立地。[S58]工事の際砂層から滋賀里Ⅰ式の浅鉢1点。石斧採集。	60
4	簗瀬	五個荘町簗瀬	緩扇	1 B	[H2]土器棺墓1基(長原式)。	63. 65
5	五位田	五個荘町五位田	緩扇	1 B	[H5]包含層(黒褐色土)から突帯文土器。[H6]晩期の焼土坑・土坑群。	33. 65
6	東宮荘	五個荘町宮荘	緩扇	1 B	[H5]縄文時代の流路(詳細不明)。	65
7	竜田	五個荘町竜田	緩扇	1 B	(詳細不明)	36
8	川添	五個荘町竜田	緩扇	1 B	[S57]SD2から中津式土器2点。	56
9	北町屋	五個荘町北町屋	緩扇	1 B	[H3]4次調査の宮間田地区で後～晩期のピット群と土坑多数。5次調査の八ノ坪地区で突帯文土器を若干包含する層を確認。	32
10	大郡	五個荘町北町屋	緩扇	1 B	[S57]1・4tr包含層(茶褐色土)から中津式。4次調査で包含層(暗黒褐色土)から少量の後晩期土器と石棒。[H元]14次調査で後期後葉土器・石鏃。	57. 66. 67
11	三俣	五個荘町三俣	緩扇	1 B	[S61]C区包含層(暗褐色土)から少量の突帯文土器。	62
12	新堂	五個荘町新堂	緩扇	1 B	[S58]突帯文土器1点。[H4]高畑地区で中期末葉～後期初頭の埋甕を伴う住居址と晩期後葉(滋賀里Ⅳ式)の土器棺墓1基、包含層からも両時期の土器。八反ノ切地区で焼土を持つ土坑から土偶・石冠のほか突帯文土器・石器。[H4]包含層(黄灰色細砂)から数点の無文土器。	58. 64. 65
13	法源寺北	五個荘町木流	緩扇	1 B	[S60]B区包含層(淡黄灰色土)から少量の突帯文土器。	61
14	木流	五個荘町木流	緩扇	1 B	[S59]Etrで合わせ口の土器棺墓1基(長原式)とピット・溝。	59
15	山本	五個荘町山本	緩扇	1 B	[S57]C区包含層(暗褐色土)から数点の突帯文土器。	56
16	五十坊	五個荘町伊野部	緩扇	1 B	土器を採集(晩期？詳細不明)。	60
17	瓦屋寺カマエ	八日市市建部瓦屋寺町	緩扇	1 B	[S55]2tr第6層(淡灰色混礫砂質土)を中心に数点の晩期前半土器・石器。後に夜臼式類似土器と籾。	1. 40. 71
18	日吉	八日市市建部日吉町	緩扇	1 B	[S54]1tr中央部で土器棺墓1基、同SB06埋土から突帯文土器と磨製石斧、4trから突帯文土器。[S58・59]1trⅣ層から宮滝式・突帯文土器6点。	70. 72
19	神田	八日市市神田町	緩扇	1 B	分布調査で石棒採集。	3
20	正楽寺	能登川町神郷	氾濫	1 C	[H5]北白川上層式期の竪穴住居址5棟・掘立柱建物14棟・環状木柱列痕・土器塚・屈葬人骨・貯蔵穴群、土面・耳栓・石剣・石棒・御物石器・垂飾・有舌尖頭器、土器では関東～東海の堀ノ内式・北陸西南部の気屋式・四国の平城式・九州東北部の小池原上層式など遺物多数。	16
21	斗西	能登川町神郷	氾濫	1 C	[H7]5次B区の後世遺構から滋賀里Ⅰ式土器・突帯文土器。	17
22	善教寺	能登川町種	氾濫	1 C	[S59]2・3・6trで包含層から北白川上層式1・2期土器。	82
23	法堂寺	能登川町佐野	氾濫	1 C	[S63・H元]A区SD01から磨製石斧、SK06・07から突帯文土器。[H6]6次調査でC区包含層とD区後世遺構から中津式土器。7次調査でSD01第5層から後期前葉・突帯文土器。廃寺確認調査で晩期遺構。廃寺1・2次調査で後期遺構。[H7]9次調査で前述のSD01の続きを検出。	12. 34. 35. 45. 46. 55
24	今安楽寺	能登川町今	氾濫	1 C	[S59]1次調査で中津式最古段階の土器。[S60]包含層などから北白川上層式1～2期土器。[S63・H元]後期初頭の2棟の住居址・9基の埋設土器や土器集積遺構などから、ｺﾝﾃﾅ200箱以上の遺物が出土、土器は船元式・五領ヶ台式・咲畑式、中津式～北白川上層式2期がある。	13. 89
25	柿堂	能登川町今	氾濫	1 C	[H2]2次調査で包含層(暗黄褐色粘質土)から少量の後期前葉土器。[H3]3次調査で包含層(淡黄灰色粘土・青灰色系粘土)から中津～福田KⅡ式・石器がｺﾝﾃﾅ6箱。[S59～61]後世遺構から若干の中津式・突帯文土器・石器。	14. 15. 84
26	千里	能登川町今	氾濫	1 C	[S60]後世遺構から突帯文土器。	83
27	掛樋	能登川町垣見	氾濫	1 C	[H元]7trSK1とSR2南肩の黒灰色粘質土から晩期全般の土器・石器。	85
28	三敷前	能登川町小川	氾濫	1 C	[S57]1・2trの後世遺構から中津式土器・突帯文土器。	81
29	宮の前	能登川町小川	氾濫	1 C	[S54]A区第6層から北白川C式土器7点。	40. 49
30	林・石田	能登川町林	氾濫	1 C	[H元]SR1緑灰色粘質土から比較的まとまった量の中津式～縁帯文土器成立期の土器・石器。[H4・5]F区から埋甕を伴う住居址と土坑、G区から中期と思われる大形の石棒。	54. 86
31	高岸	能登川町伊庭	氾濫	1 C	[H4]SX04・07(縄文時代の遺構？)から数点の突帯文土器。	87
32	下羽田	八日市市下羽田町	下段	2 A	[S54]暗褐色砂泥面で突帯文期の遺構群(竪穴住居址1基・柵列1基・土壙墓1基・土器棺墓3基・木棺墓1基)。[S56]後・晩期の包含層を確認。[S62]1tr包含層から有舌尖頭器。	7. 40. 71
33	五反田	八日市市中羽田町	下段	2 A	[S57]条痕文系突帯文土器の底部片1点と石器(石鏃・剥片多数)を表採。	4
34	内堀	八日市市上羽田町	下段	2 A	[S56]方形周溝墓埋土から数点の北白川C式・突帯文土器と石器。	2. 40
35	布施横田	八日市市布施町	下段	2 A	[S58]6trで突帯文期の合わせ口土器棺墓1基。	5
36	布施	八日市市布施町	下段	2 A	[S60]2tr包含層(暗茶灰色粘質土)から突帯文土器数点。	6
37	常衛	近江八幡市西生来町	氾濫	2 B	[S60]9trで集石土坑2基・土坑2基・焼土痕1基、SK1・SK5から北白川C式2～3期土器。[H元]A地区SX06から土器5点。	42. 76
38	上出A	安土町上出	氾濫	2 B	湿地の島状微高地に立地。[H8]蛇砂川地点で前期後半(北白川下層Ⅱ・Ⅲ式～大歳山式～鷹島式)の竪穴住居址6基、晩期後葉～弥生前期前半の土器棺墓12基、中期後葉～後期前半の土器。朱塗りの諸磯式の浅鉢多数。 [H9]山本川地点で中期後葉の竪穴住居址3棟・石囲炉3基、晩期後葉～弥生前期前半の土器棺墓10基・木棺墓12基、包含層から早期前葉・前期後半(北白川下層Ⅱ・Ⅲ式)・中期初頭・後期前葉・弥生前期後半土器。	23. 24. 47

表1　湖東南部地域の概要(1)

No.	遺跡名	所在地	立地	群	概要	文献
39	中屋	安土町中屋	氾濫	2B	[H4]第4区の遺構内外から中津Ⅰ式土器。	73
40	御所内	近江八幡市御所内町	氾濫	2B	[H6]条痕文系突帯文土器、胎土は在地(整理中)。	
41	後川	近江八幡市長田町	氾濫	2B	[H元]11tr包含層(黒ボク土)から北白川C式土器・浮線網状文土器。15trSK2(黒ボク土)から、中津式土器。[H2]8tr溝・ピット埋土から、炭化物・突帯文土器細片。13tr流路埋土(灰色砂)から長原式を中心にｺﾝﾃﾅ3箱分の突帯文土器、東海系も混じる。[H3]5次調査で後期土坑1基。[H4]後期の遺物包含層を確認。[H5]B区で土器棺墓1基と平地式住居1棟。	10.39.52.68
42	金剛寺	近江八幡市金剛寺町	氾濫	2B	[S61]2trSX01から中津式土器1点。	44
43	蔵ノ町	近江八幡市上田町	氾濫	2B	[S61]1tr後世遺構で有舌尖頭器。3-1tr包含層(黒色砂質土)から石匙。	51
44	久里氏館	近江八幡市西本郷町	氾濫	2B	[H6]15次調査で土坑から石匙。	34
45	黒橋	近江八幡市西庄町	氾濫	2B	[S62]SR1から滋賀里Ⅱ～Ⅲ式土器。[H2]B地区3trSR1から数点の後期土器。	26.48
46	鷹飼	近江八幡市西庄町	氾濫	2B	[S59]SK1から突帯文土器と安山岩系の石錐・剥片石器。	11
47	出町	近江八幡市出町	氾濫	2B	[S61]SR2下層から少量の晩期土器。	9
48	烏打峠	安土町上豊浦	山地		晩期土器(詳細不明)。	40
49	吉ヶ藪	近江八幡市武佐町	下段		有舌尖頭器(詳細不明)。	42
50	内荒井	近江八幡市船木町	三角		石錐(詳細不明)。	36
51	城東A	能登川町きぬがさ	湖岸	2C	(詳細不明)	36
52	城東B	能登川町きぬがさ	湖岸	2C	石鏃(詳細不明)。	36
53	獅子鼻B	能登川町きぬがさ	湖岸	2C	[S57]F・G・Mtrから突帯文土器・石器(石鏃など)。弥生中期土器も出土。	27
54	弁天島	安土町下豊浦	湖岸	2C	早期中葉～後葉・前期前葉・中期後葉・晩期の土器・獣骨。	18.19.25.69.91
55	大中の湖南	安土町下豊浦	湖岸	2C	前期・晩期土器。	20
56	大中の湖東	能登川町伊庭	湖岸	2C	[S37]干拓工事の上げ土から土器(早期条痕文系・鷹島式・船元Ⅰ～Ⅲ式・勝坂式)・石器(打製石斧・磨製石斧・石匙・石棒)を採集。	13.88
57	白王	近江八幡市白王町	湖岸	2C	早期中葉・前期前～後葉・後期前～中葉土器や異形石器などを採集。	29.30.40
58	切通	近江八幡市沖島町	湖岸	2C	土器(詳細不明)。	36
59	薬王寺溜	日野町西大路	山地	3A	有舌尖頭器採集。	71
60	五斗井	日野町河原	下段	3A	[H2]E区で後期前半の網代圧痕をもつ土器底部片(埋設土器?)。	90
61	風呂流	日野町寺尻	下段	3A	[H6]有舌尖頭器。	38
62	北代	日野町上野田	下段	3A	[H6]有舌尖頭器。	38
63	内池	日野町内池	下段	3A	晩期土器・石鏃(詳細不明)。	36
64	焼山	日野町山本	中段	3A	石匙(詳細不明)。	36
65	野辺	日野町三十坪	下段	3A	(詳細不明)	36
66	麻生	蒲生町岡本	氾濫	3B	[S60・62]切土F区で晩期遺構面2面。上層で竪穴住居、柱穴群、土器棺墓1基、ベンガラが撒かれた土坑、ｻﾇｶｲﾄﾁｯﾌﾟも遺構面全体に。ｺﾝﾃﾅ3箱の条痕文系突帯文土器・石器・石棒。下層で土坑・柱穴群を検出、若干の後晩期土器。	21.80
67	大塚城	蒲生町大塚	段丘	3B	有舌尖頭器採集。	22
68	杉ノ木	蒲生町市子松井	氾濫	3B	石匙を採集。[S62-63]4trSK1・5trSR4から滋賀里Ⅲ～Ⅳ式土器・石器。	20.22.28
69	市子	蒲生町市子殿	氾濫	3B	[S62]1tr方形周溝墓埋土から突帯文土器。[S63]4trSD09最下層(黒褐色粘質土)から条痕文系突帯文土器と石棒。	53.79
70	堂田	蒲生町鈴	氾濫	3B	石匙2点採集。	22
71	平塚	蒲生町市子川原	氾濫	3B	[S62]4tr土器溜から北白川上層式土器、同SK1から晩期後葉～弥生前期の土器、5trSR4から滋賀里Ⅲ・Ⅳ式土器。	28
72	田中	竜王町田中	氾濫	3C	後～晩期土器・石器(詳細不明)。	20
73	小口	竜王町小口	氾濫	3C	(詳細不明)。	40
74	高塚	竜王町山面	山地		有舌尖頭器2点採集。	31.71
75	馬渕	近江八幡市馬渕	氾濫	3D	[S63]Ⅰ区SD102などから突帯文土器。	50
76	勧学院	近江八幡市馬渕	氾濫	3D	[S59]包含層から生駒西麓産胎土の突帯文土器と晩期～弥生前期の偏平片刃石斧。	8
77	中ノ庄	近江八幡市中ノ庄町	湖岸	3E	(詳細不明)	36
78	長命寺湖底	近江八幡市長命寺町	湖岸	3E	[S58]1次調査で砂礫・スクモ層から中津式土器。2次調査で同層から北白川上層式・突帯文土器と丸木舟5隻。3次調査で宮滝式・突帯文土器と弥生Ⅰ・Ⅱ様式土器・石器が出土。	41.77. 78
79	大房湖岸	近江八幡市牧町	湖岸	3E	旧津田内湖の浜堤に立地。[S48]分布調査で後期前葉土器を採集。	37.41
80	水茎A	近江八幡市牧町	湖岸	3E	土器・石器(詳細不明)。	36.71
81	水茎B	近江八幡市水茎町	湖岸	3E	[S39]後期前～中葉の土器と共に丸木舟2隻。晩期土器も。	74.75
82	水茎C	近江八幡市水茎町	湖岸	3E	旧水茎内湖に突出した小嘴端に立地。[S39]後期前～中葉の土器と共に丸木舟5隻。晩期土器も。	74.75
83	小田	近江八幡市小田町	湖岸	3E	石匙(詳細不明)。	36
84	沖島湖底	近江八幡市沖島町	湖底	4	土器(詳細不明)。	43
85	沖島赤鼻湖底	近江八幡市沖島町	湖底	4	石斧(奥津島神社蔵)。	37
86	宮ガ浜湖底	近江八幡市沖島町	湖底	4	シジミ漁で早期・後期土器を採集。	19

凡例：「立地」は、以下のように略した。
湖岸近接地：湖岸　三角洲：三角　氾濫平野：氾濫　緩扇状地：緩扇　下位段丘：下段　中位段丘：中段
「概要」の[　]内は現地調査を実施した年度であり、Sは昭和、Hは平成の略である。またトレンチはtrに、遺構は以下の記号に略した。
土坑：SK　自然流路流路：SR　溝：SD　その他：SX

表1　湖東南部地域の概要(2)

No.	遺跡名	群	旧石器・有舌	早期 前	早期 中	早期 後	前期 前	前期 中	前期 後	中期 前	中期 中	中期 後	後期 前	後期 中	後期 後	晩期 前	晩期 中	晩後～弥前期前半	弥生前期以降	特記事項
1	上出	1A																		石刀
2	善覚寺	1B																○		
3	録田	1B														○				
4	梁瀬	1B																○		土器棺墓
5	五位田	1B																○		
6	東宮荘	1B																		
7	竜田	1B																		
8	川添	1B											○							
9	北町屋	1B											←		→			○		
10	大郡	1B											○		○	←		→		石棒
11	三俣	1B																○		
12	新堂	1B										◎						○		石棒・土偶、竪穴住居・土器棺
13	法源寺北	1B																○		
14	木流	1B																○		
15	山本	1B																○		
16	五十坊	1B																		
17	瓦屋寺カマエ	1B								←		→				○	○	●	○	
18	日吉	1B								←		→			○			○		
19	神田	1B											←					→		石棒
20	正楽寺	1C	○										◎							土面・石棒、竪穴住居・木柱列
21	斗西	1C														○		○		
22	善教寺	1C											◎							
23	法堂寺	1C											○					○	○	
24	今安楽寺	1C								○		○	◎						○	竪穴住居・埋設土器
25	柿堂	1C											○					○		
26	千里	1C																○	○	
27	掛樋	1C														○	○	○	○	石棒
28	三敷前	1C											○					○	○	
29	宮の前	1C										○								
30	林・石田	1C											◎						○	石棒、竪穴住居
31	高岸	1C																○		
32	下羽田	2A	○															●		
33	五反田	2A														←	→			
34	内堀	2A										○						○		
35	布施横田	2A																○		土器棺墓
36	布施	2A																○		
37	常衛	2B										○								集石土坑・土坑・焼土痕
38	上出A	2B			○			○	◎	○		◎						●		けつ状耳飾、竪穴住居・土器棺
39	中屋	2B											○	←				→		黒曜石
40	御所内	2B																○		
41	後川	2B										○	○					○		土偶2、平地式住居・土器棺墓
42	金剛寺	2B											○							
43	蔵ノ町	2B	○																	
44	久里氏館	2B																		
45	黒橋	2B											←		→	○				
46	鷹飼	2B																○	○	
47	出町	2B														←		→	○	
48	鳥打峠															←		→		
49	吉ヶ薮		○																	
50	内荒井																			
51	城東A	2C																	○	
52	城東B	2C																	○	
53	獅子鼻B	2C																○		
54	弁天島	2C			○	○	○					○				←		→		けつ状耳飾
55	大中の湖南	2C					←		→							←		→	○	独鈷石
56	大中の湖東	2C				○				○	○								○	石棒
57	白王	2C			○		○	○	○		○	○	○	○						
58	切通	2C																		

表2　遺跡の消長(1)

No.	遺跡名	群	旧石器・有舌	早期 前	早期 中	早期 後	前期 前	前期 中	前期 後	中期 前	中期 中	中期 後	後期 前	後期 中	後期 後	晩期 前	晩期 中	晩後～弥前期前半	弥生前期以降	特記事項
59	薬王寺溜	3A	○																	
60	五斗井	3A												○						
61	風呂流	3A	○																	
62	北代	3A	○																	
63	内池	3A															←	→		
64	焼山	3A																		
65	野辺	3A																		
66	麻生	3B												○				◎		石棒・ﾍﾞﾝｶﾞﾗ、住居址・土器棺
67	大塚城	3B	○																	
68	杉ノ木	3B											○				○	○	○	石棒
69	市子	3B																○		石棒
70	堂田	3B																		
71	平塚	3B												○			○	●		
72	田中	3C											←				→	○		
73	小口	3C																		
74	高塚		○																	
75	馬渕	3D																○		
76	勧学院	3D																○		
77	中ノ庄	3E																		
78	長命寺湖底	3E						?					○	◎	○			○	○	石棒、丸木舟
79	大房湖岸	3E											○							
80	水茎A	3E											←		→					
81	水茎B	3E											○			←		→	○	丸木舟
82	水茎C	3E											○			←		→	○	丸木舟
83	小田	3E																		
84	沖島湖底	4																	○	
85	沖島赤鼻湖底	4																	○	
86	宮ガ浜湖底	4	○			?							←	?	→					

凡例：○は活動痕跡がみられる時期。◎はそのうち希少性のある物資や祭祀装置の存在（時期が明確なものに限る）などを、●は弥生前期前半の土器の存在を示す。また矢印は出土遺物の詳細な時期が不明であることを意味する。

表２　遺跡の消長(2)

地形も考慮しながら地理的なまとまりで流域ごとに12の群構成をおこなった。地形については「５万分の１土地条件図　近江八幡」(国土地理院)などを参考にした（第１図）。２Ａ群～２Ｃ群については、愛知川が八日市平野をかつて流れていたことから、旧愛知川流域群としてまとめた。

また表１は各遺跡の概要を、表２は各遺跡の消長をまとめたものである。以下、群ごとに概要をまとめた。弥生遺跡に関しては、縄文時代晩期と併行関係にあることが近年の調査事例によりわかってきた前期前半（Ⅰ様式古・中段階）と前期後半のものを挙げている。(3)

１Ａ群（愛知川上流域群：１）　永源寺町の上出遺跡からは石刀・石斧が出土しているとされている。したがって、当グループの居住性・備蓄性を示すものついては不明である。永源寺町はほとんどが山地により占められているが、今後の踏査次第では充分に縄文遺跡が見つかる可能性はあると思われる。また弥生時代前期の痕跡は、まだ見つかっていない。

１Ｂ群（愛知川中流域群：２～19）　西側を繖山丘陵により遮られた、愛知川により形成された緩扇状地上に主に立地する、五個荘町及び八日市市北部の19遺跡で、北部15遺跡と南部４遺跡に分けられる。北部小群は扇端部に立地し、南部小群は箕作山東部の後背湿地と扇状地の地形変換線上に立地する。中期の遺物が出土したとされる遺跡のうち、調査により確実な新堂遺跡の縄文中期後葉～後期前葉（埋甕を伴う住居址）をもって、本群の形成開始期としたい。新堂遺跡からはこのほかに縄文晩期の痕跡として、土器棺墓や石棒・石冠・土偶といった祭祀品がみられる。本群では縄文後期の痕跡はあまりみられないが、縄文晩期遺物はほとんどの遺跡で出土しており、木流遺跡・築瀬遺跡・日吉遺跡でも土器棺墓が検出されている。瓦屋寺カマエ遺跡では、夜臼式類似の土器と籾が出土しているとされている。新堂遺跡以外の祭祀品としては、大郡遺跡・神田遺跡

で石棒（いずれも縄文後～晩期）がある。

１Ｃ群（愛知川下流域群：20～31）　愛知川左岸の氾濫平野に立地する、能登川町域の12遺跡であり、その多くは微高地上に位置している。正楽寺遺跡で有舌尖頭器が出土しているが、本群の形成は今安楽寺遺跡にみられる縄文中期前葉からと考えられる。縄文後期前葉にはさらに林・石田遺跡や正楽寺遺跡など居住施設をもつ遺跡が多く形成されるが、縄文後期中～後葉まで継続する遺跡はない。なかでも正楽寺遺跡には広域に及ぶ交易の結果もたらされた様々な品物があり、関東～九州地方各地の土器や水銀朱・ベンガラ朱、石器の原材料とされた玄武岩や安山岩、垂飾などがある。また環状木柱列をともなう広場や配石遺構・屈葬人骨が検出されているほか、祭祀品では土面・石棒・御物石器がある。これらから正楽寺遺跡が１Ｃ群の中心をなすだけでなく、より広い地域を含めた中核的な役割を持った集落であったことが想定される。このほかに今安楽寺遺跡で搬入品として関東・東海系土器がみられ、祭祀品では石棒が林・石田遺跡と掛樋遺跡でみられる。(4)

２Ａ群（下羽田・布施群：32～36）　雪野山丘陵東側の低位段丘に立地する八日市市域の５遺跡である。この地域は古代より蒲生野として知られ、『万葉集』などにも詠まれた地である。東部２遺跡と西部３遺跡に分けられ、そのうち東部小群は雪野山丘陵東部の後背湿地との地形変換線上に立地し、西部小群は布引山丘陵に刻まれた東西に長い谷を刻んだ河川が、西行して平地に達した地に立地している。布引山丘陵では３地点（庚申溜遺跡・池ノ谷遺跡・玉緒遺跡）から旧石器が見つかっており、有舌尖頭器も下羽田遺跡から出土している。本格的な形成は縄文中期後葉（内堀遺跡）からであるが、縄文後期遺跡は現在のところ知られていない。しかし全ての遺跡で縄文晩期の痕跡が見られ、布施横田遺跡では土器棺墓が検出されているほか、下羽田遺跡では土器棺墓３基とともに木郭を伴う土器棺墓１基も検出されている。

２Ｂ群（上出Ａ・後川群：37～47）　近江八幡市と安土町の境に広がる11遺跡で、蛇砂川がその東寄りを流れている。旧愛知川が形成した氾濫平野に立地する。有舌尖頭器が蔵ノ町遺跡で出土しているが、本格的な形成は上出Ａ遺跡の縄文早期前葉からである。この上出Ａ遺跡は、２Ｂ群の中核となる集落と推定される。まず遺構では、縄文前期中～後葉・縄文中期後葉・縄文晩期後葉～弥生時代前期前半の住居址や墓が多数検出されており、土器棺墓には東海系条痕文土器を用いたものもみられる。搬入品としては朱塗りの諸磯式土器の浅鉢や咲畑式土器、黒曜石（信州産？）があり、祭祀品ではけつ状耳飾り（縄文前期）・土鏃・石棒（縄文晩期）がみられる。このほか、常衛遺跡で縄文中期後葉の集石土坑などが検出されており、御所内遺跡や後川遺跡では縄文晩期後葉の土器棺墓がみられる。祭祀品としては、後川遺跡で土偶２点（縄文後期）がある。また本群の周辺にはこのほかに、内荒井遺跡(48)・吉ヶ薮遺跡(49)・鳥打峠遺跡(50)がある。

２Ｃ群（大中の湖岸群：51～58）　近江八幡市・安土町・能登川町にまたがる、旧大中の湖および小中の湖の周辺に立地する９遺跡（湖岸近接地）で、切通遺跡以外は比較的近接して内湖の南側に位置している。本群は白王遺跡・弁天島遺跡の縄文早期中葉から形成が始まり、途中断絶はするが縄文晩期後葉まで痕跡をたどることができる。しかし弥生時代前期の明確な痕跡は大中の湖南遺跡以外はみられない。搬入品では大中の湖東遺跡に中部高地系の勝坂式土器があり、祭祀品では弁天島遺跡でけつ状耳飾り（縄文前期）が、大中の湖南遺跡で独鈷石（縄文晩期）がある。居住性・備蓄性・祭祀性を示す遺構・遺物はみられない。

３Ａ群（日野川上流域群：59～65）　日野川右岸の下位段丘上に主に立地する日野町域の７遺跡で、東部３遺跡と西部４遺跡に分けられる。有舌尖頭器が３遺跡と比較的多く出土しているが、後続する時期は五斗井遺跡の縄文後期前葉まで空白期間がみられ、この時期をもって本群の形成開始期としたい。そのうち弥生時代まで継続する遺跡はなく、日野町域の弥生遺跡は森西条遺跡と宮ノ前遺跡の２ヶ所が知られるのみである。

３Ｂ群（日野川中流域群：66～71）　日野川と佐久良川の合流地点で形成された氾濫平野に主に立地する蒲生町域の６遺跡で、その多くが扇状地との地形変換線より北西（下流）に立地している。この氾

濫平野には、近年のほ場整備が行われるまでは、かつての日野川の乱流を物語る流路跡や氾濫の痕跡を示す乱れた土地区画が残されており、しばしば洪水に見舞われる不安定な土地であったことを示している。[5] 山地立地の大塚城遺跡で有舌尖頭器があるが、縄文後期前葉から遺跡が形成され始め(杉ノ木遺跡)、縄文晩期では唯一扇状地に立地する麻生遺跡で、竪穴住居址と土器棺墓が検出されている。弥生時代まで継続する遺跡も多く、杉ノ木遺跡で弥生前期前半の痕跡がある。祭祀品としては、石棒が麻生遺跡・市子遺跡・杉ノ木遺跡で出土している（縄文後～晩期）。

３Ｃ群（田中・小口群：72・73）　氾濫平野に立地する竜王町域の２遺跡で、田中遺跡で縄文後～晩期の遺物が出土しているというが、詳細は不明である。竜王町にはこのほかに有舌尖頭器２点が見つかっている、山地に立地する高塚遺跡(74)がある。

３Ｄ群（馬淵群：75・76）　日野川の氾濫平野に立地する近江八幡市域の２遺跡で、縄文晩期後葉の土器が出土しているが、詳細は不明である。

３Ｅ群（津田・水茎内湖群：77～83）　近江八幡市の日野川河口付近にかつて存在した内湖岸に立地する７遺跡で(湖岸近接地)、西側の旧水茎内湖岸に位置する４遺跡と、東側の旧津田内湖岸に位置する３遺跡がある。縄文前期中葉の土器が長命寺湖底遺跡で見つかっているが、湖底遺跡における１点のみの出土のため、確実性に欠ける。縄文前期の遺物は水茎遺跡にもあるというが詳細は不明であり、一挙に遺跡数が増加する縄文後期前葉をもって、本群の形成開始時期としたい。湖東南部地域では本群でのみ該期の丸木舟が見つかっており(長命寺湖底遺跡５隻、水茎Ｂ遺跡２隻、水茎Ｃ遺跡５隻)、当時の移動手段を推測する上で重要な情報を与えてくれる。全長７ｍ前後のものが多い。祭祀品では、長命寺湖底遺跡で石棒が出土している。

４群（沖島群：84～86）　琵琶湖最大の島である沖島と湖岸の間に位置する、３つの湖底遺跡である。宮ガ浜湖底遺跡からは旧石器時代の石槍が見つかっている。縄文早期後葉・後期の土器も見つかっているが、湖底遺跡からの採集品のため、やはり確実性に欠けるといえる。ほかの２遺跡については、縄文時代の遺物とともに弥生時代の遺物も採集されているというが、詳細は不明である。

Ｃ．事象の変化

以上、当該地域の事象面について整理をおこなった。以下ではこれらの成果をもとにして、当該地域における事象の変化について整理する。

縄文草創期の遺物とされる有舌尖頭器は、３Ａ群の３遺跡を始めとして９遺跡から出土しているが、そのほとんどが段丘や山地、あるいはその縁辺に立地している。湖東南部地域では４ヶ所で旧石器が見つかっているが、宮ガ浜湖底遺跡を除く３ヶ所は、大半が砂と粘土の互層からなる古琵琶湖層群蒲生累層により構成される布引山丘陵あるいはその縁辺に立地しており、縄文草創期と同様の傾向を示している。以下、適応地の変化などから第１～第４の段階を設定し、その内容を背景に検討、事象面の整理をおこないたい。

第１段階　２Ｂ群の上出Ａ遺跡と２Ｃ群の白王遺跡・弁天島遺跡の形成が始まる縄文早期前～中葉を画期とする段階である。２Ｃ群は湖岸周辺に立地しており、大中の湖東遺跡にも縄文早期後葉の痕跡がある。一方の上出Ａ遺跡の周辺は現在でも湧水が激しい湿地帯であり、堆積が現在ほど進んでいない当時であれば、同様の立地条件と考えられる。縄文前期後葉段階になるが、上出Ａ遺跡には居住施設・貯蔵施設がある。

第２段階　氾濫平野の微高地に立地する１Ｃ群では、今安楽寺遺跡の形成が縄文中期前葉に始まる。第２段階は、この縄文中期前半を画期とする段階である。湖東南部地域では縄文中期前葉・中葉段階の遺跡は数えるほどしか確認されていない。今安楽寺遺跡でもわずかに土器の確認だけにとどまっており、居住・備蓄・祭祀の痕跡を示す遺物・遺構の検出例はない。

第３段階　愛知川流域の１Ｂ群の新堂遺跡や２Ａ群の内堀遺跡、あるいは日野川流域の３Ａ群の五斗井遺跡や３Ｂ群の杉ノ木遺跡の形成が始まる、縄文中期後葉～後期前葉を画期とする段階である。それまでは愛知川流域でのみ見られた遺跡群の形成が、日野川流域にも広がっている。また氾濫平野よりも更に上流域の、扇状地や段丘上にも拡散していく傾

向が読みとれる。特に１Ｃ群には、居住施設・備蓄施設・祭祀装置が多く見受けられる。

第４段階　３Ｄ群の馬渕遺跡・観学院遺跡が形成されるなど、全群で多くの遺跡が形成される縄文晩期後葉～弥生前期前半を画期とする段階であり、各群での拡散がより一層進んだものと思われる。２Ｂ群の後川遺跡や３Ｂ群の麻生遺跡には、居住施設がある。土器棺墓・木棺墓も１Ｂ群・２Ａ群・２Ｂ群などでみられる。祭祀品では１Ｂ群・２Ｂ群で土偶が出土しており、石棒も各群でみられる。

Ｄ．遺跡群にみる事象

上記のような事象の整理から、遺跡群の継続性には３つのタイプがあることがわかる。①２Ｂ群・２Ｃ群のように、比較的長期にわたり継続する定着度の高い遺跡群、②１Ｂ群・１Ｃ群のように、それより若干遅れて形成され、以後継続する遺跡群、③それ以外の縄文晩期後葉段階に形成される遺跡群である。居住施設や備蓄施設と思われる遺構は①・②のタイプにみられ、特に②タイプには竪穴住居や貯蔵穴の可能性を持つ土坑がみられる遺跡が多く、祭祀装置としては正楽寺遺跡の環状木柱列などがあげられる。

また愛知川流域と比較すると、日野川の流域は遺跡・遺物ともに検出量が少なく、したがって縄文中期段階以前については不明瞭である。この傾向は氾濫平野において特に顕著であるが、これには日野川のもつ特徴が大きく関わっている。図１に明らかなように、愛知川・野洲川といった河川は、鈴鹿山脈から続く丘陵地を削りながら扇状地・氾濫平野を形成し、平野を形作っているが、それらと比較すると日野川は河口部から上流20㎞まで氾濫平野を形成している。それは前述のように、①日野川は山地河道が短いため上流部における集水域が狭い、②平均流域高度が低いため河床勾配が小さい、③流域の大部分が未固結の古琵琶湖層群からなる、といった複数の理由のため砂礫が下流まで掃流されず、広大な扇状地を形成することが不可能であったためである。したがって愛知川・野洲川のような、扇状地と氾濫平野との地形変換線と主要河川の交点という重要な結節点が存在せず、またそのたびたび氾濫する性格から、その下流域に縄文晩期まで遺跡群が形成されなかったと考えられるのである。[6]

３．現状における予察と問題点の抽出

以上、湖東南部地域における事象上の整理をおこなった。事実関係については今後も追加・訂正の必要があると思われるが、共同研究の成果の一つとしてそれらの背景となった要素に関して、以下提示していきたいと思う。

Ａ．移ろいを志向・促進させた背景・要因について

第１段階に関する予察と課題

湖岸近接地（２Ｃ群）や湿潤な土地（２Ｂ群）に縄文早期段階の遺跡が集中する点が、本段階の特徴である。この傾向は、瀬口氏が先の論文で提示しているように、生態系のうち最も高い一次生産量を湖岸近接地が有しており、そこを基盤とした生活を営んでいたことがその生成要因として想定される

しかし、縄文早期～前期段階の確実な痕跡については、２Ｂ群の上出Ａ遺跡における居住施設・備蓄施設以外には全く不明である。２Ｃ群の白王遺跡や大中の湖東遺跡などにおいて石鏃・石錘が、弁天島遺跡において獣骨が出土するなどしており、当段階の生業形態の中に狩猟・漁労が含まれていたことを推測することはできるが、それ以上のことは不明瞭である。今後はさらなる精査によりその生業形態を把握し、後段階との比較が必要であろう。

第２段階に関する予察と課題

縄文中期前葉・中葉段階に形成される遺跡が少ないことは前述のとおりだが、その段階になぜ１Ｃ群を選んだのか、その選択理由についての積極的な要因は現在のところ見出しにくい。それまでの遺跡群の形成は湖岸近接地・氾濫原にとどまっており、比較的１次生産量が低いこの地域に、隣接する２Ｃ群から居住域を拡大したと考えることが、現在では最も妥当性があるように感じられる。そうであれば、さらにその拡散の原因を追求するべきである。人口の増大や湖岸近接地における資源の枯渇といった要因を想定することもできるが、それらを裏付ける資料はなく、当段階における選地理由については今後の課題としたい。

第３段階に関する予察と課題

縄文中期後葉～後期前葉段階には、立地する地形

を問わずに遺跡の数が増加し、居住性・備蓄性・祭祀性を示す資料も一段と増加している。筆者はその背景として、東日本、特に鈴鹿山脈を挟んだ伊勢地方との関係を想定したい。土器型式でいう縄文中期末葉の北白川C式期には、それまでの瀬戸内に分布範囲の中心を持つ船元・里木式土器の範囲から、関東の加曾利E式の影響を強く受けて成立した土器分布圏へと変化し、それが中津式などの縄文後期前葉の土器型式へと受け継がれていく。土器はその変化が比較的とらえられやすい資料ではあるが、決して土器のみが変化したわけではなく、それを含めた社会全体が東日本からの影響を受けたと考えるのが妥当であろう。縄文中期後葉以降とそれ以前では、土器以外ではどう変化しているのか。具体的には2B群・1C群の縄文中期中葉以前の内容と2B群と1B群・1C群の縄文中期後葉以降の内容とで比較できるのだが、その一つとして後者における土偶などの祭祀用具や環状木柱列といった装置の出現が挙げられる。この具体的な検討に関しては、今後の課題である。

伊勢地方の縄文遺跡のあり方に関しても今後の検討課題であるが、伊勢地方に抜けるルートとして、愛知川沿いに八日市市から永源寺町を通り伊勢へ抜ける現在の国道421号線（八風街道）があり、伊勢への交通路として現在でも重要な位置を占めている。一方の日野川沿いにはそういったルートは見当たらず、最上流部から一旦野洲川流域に出て鈴鹿山脈を越えなければならないが、そのルートは現在国道477号線として使われているルートであり、国道421号線と比較するとその険しさは否定できない。隣接する伊勢地方の縄文遺跡における居住施設・祭祀遺物や施設・備蓄施設といった諸要素を検討することにより、この説の妥当性を今後補強していきたい。

第4段階に関する予察と課題

縄文晩期後葉段階になると、活動痕跡が前段階よりもさらに増加し、ほとんどの遺跡群で痕跡が確認される。日野川流域には3C群・3D群など、空白地域にこの段階より遺跡群が形成される。また縄文晩期後葉と共時性を持つとされる弥生時代前期前半段階の土器も、1B群の瓦屋寺カマエ遺跡、2A群の下羽田遺跡、2B群の上出A遺跡・3B群の平塚遺跡で出土している。なかでも1B群の瓦屋寺カマエ遺跡では、夜臼式土器類似の土器と籾が見つかっており、下羽田遺跡・上出A遺跡では、木棺墓という弥生時代に入ってから受容したとされる墓制がみられる。これらの遺跡にまず第一に共通するのは湿潤な土地という条件であり、そこに「初期的農耕」の受容が背景として想定される。このほかの遺跡群では見られないこれらの現象について、こういった遺跡は新しい系譜を持つ土器をどのようにして受け入れたのか。一見すると不規則に入っている弥生前期前半の土器がどういった理由で入り込むのか、その背景をさらに考えていかなければならないだろう。

B．集団のあり方について

湖東南部地域における遺跡群のあり方には、前述のように3つのタイプがあることを明らかにした。第3のタイプは、それまで集落が形成される要因の存在しなかった日野川の氾濫平野に、縄文晩期後葉段階になって拡散が始まったものと考えた。ここでは前二者について、その差異は何を示すのか、また何に起因するのかといった問題に関してさらに掘り下げてみたい。

まず両者の事象面を、ここでもう一度整理してみる。比較的長期にわたり継続する、定着度の高い遺跡群である第1のタイプには、2B群・2C群がある。2B群は旧愛知川流域の氾濫平野に位置し、縄文早期前葉から形成される。検出された遺構・遺物から、中心となる集落は上出A遺跡および後川遺跡と考えられる。2C群は大中の湖周辺に位置し、縄文早期中葉から形成される。中心となる集落については、遺構の検出例が皆無であり、また正式な調査例が少ないため、現時点で想定することはできない。

第1のタイプよりは若干遅れて形成される第2のタイプには、1B群・1C群がある。1B群は主に扇状地の先端部から氾濫平野にかけて位置し、縄文中期後葉から形成される。検出された遺構・遺物から、中心となる集落は新堂遺跡と考えられる。1C群は氾濫平野に位置し、縄文中期前葉から形成が始まる。検出された遺構・遺物から、中心となる集落は林・石田遺跡および正楽寺遺跡と考えられる。

この二つのタイプに共通する点は、ともに愛知川が形成した地形上に立地している点で、前者は旧愛

知川流域に、後者は現愛知川流域に位置している。また内容的には、住居施設や土器棺墓などの埋葬施設、さらに土偶・石棒などの祭祀用品を有している点が挙げられる。

さらにこれらの資料を詳細に検討すると、縄文後期初頭段階には、住居施設などの痕跡が後者（１Ｂ群・１Ｃ群）に集中することが指摘できる。２Ｂ群には縄文中期末葉段階（北白川Ｃ式期）の住居施設などがみられるが、縄文後期段階になると明確な痕跡を残す遺跡が一挙に減少する。一方の１Ｂ群・１Ｃ群には、新堂遺跡の縄文中期末葉～後期初頭段階の住居址を始めとして、縄文後期前葉から住居址などの遺構群が増加する。すなわちここで、縄文中期末葉段階に、当地域の集落の中心が２Ｂ群・２Ｃ群から１Ｂ群・１Ｃ群へと移行したと筆者は考える。しかし全てが移動したわけではなく、後川遺跡にみられる縄文後期段階の遺構あるいは土偶や、その後も断絶しながら縄文晩期後葉まで継続する痕跡から、それは裏付けられるであろう。すなわち２Ｂ群内で上出Ａ遺跡・常衛遺跡→後川遺跡という系譜が想定できるとともに、２Ｂ群・２Ｃ群→１Ｂ群・１Ｃ群という拡散の系譜が想定できるのである。

「縄文後期段階になって、当地域の中心が移行した」という現象の背景には、何が考えられるであろうか。特に１Ｃ群に集中する縄文後期前葉の痕跡には、氾濫平野に立地するという土地条件も含めて何らかの理由があると思われる。１Ｃ群には縄文後期中～後葉段階の明確な痕跡がなくなってしまうことも含めて大変興味深い現象ではあるが、これらについては今後の課題としたい。

４．まとめ

本稿では、各遺跡の事実関係の集成・把握、及びそれをベースとした湖東南部地域における縄文遺跡の展開の経緯とその背景・要因を探ってきた。対象面積の広さ・対象遺跡の多さから、充分に検討できていない部分も多いが、これまでの重要な点について要約し、まとめとしたい。

湖東南部地域に所在する86箇所の縄文遺跡は、地理的に12に群分けできる。そして４つの段階、すなわち①縄文早期前葉～中葉、②縄文中期前葉、③縄文中期後葉～後期前葉、④縄文晩期後葉～弥生前期前半を画期として設定できた。それぞれの形成要因として②については明確な意見を持たないが、①については湖岸近接地の豊饒性を、③については東日本との交流を、④については初期的農耕の受容を、想定した。またこうした段階の設定とは別に、愛知川左岸中・下流域における、縄文中期から後期にかけての集団の移動を想定した。

今後の課題としては、まず第１により資料の精査を行い、旧石器時代・弥生時代をも含めたさらなる通時的な検討を行っていくことが挙げられる。縄文時代の前後の時期も含めた検討を行うことにより、近江の先史社会の位置付けが、より明確になっていくものと思われる。そのための各時代の事実関係の把握をより一層深めていきたい。

第２に、遺跡群間の構造とともに、遺跡群内の構造についてもより細かな検討を行っていきたい。グループとして扱った各遺跡群を、遺跡範囲にとらわれることなく、調査地点の集合体としてさらに各調査結果を吟味し、その遺跡群の傾向をとらえていきたい。特に２Ｂ群の上出Ａ遺跡や常衛遺跡一帯の地域は、ここ１・２年の調査において各地点で縄文の遺構・遺物が検出され、また出土しており、小地域内における立地のあり方など、検討すべき課題は多いと思われる。

第３に周辺諸地域との関係をさらに検討していきたい。今後も湖北地域・湖西地域など、近江各地域の検討を共同研究としておこなっていく予定である。そしてさらに前述のように、湖東地域の縄文時代を考える際には、鈴鹿山脈を隔てて隣接する伊勢地方とのつながりを重視しなければならない。また同様に美濃地方や若狭地方・山城地方など、近江に隣接する各地域についても、今後は検討を進めていくべきである。滋賀県の各遺跡から発見される搬入品と思われる遺物の様相・傾向と、そういった外界である周辺地域でのあり方との比較を通して、その意義について考えたい。

これらの検討を通じて、経済構造あるいは社会構造といったより人類学的な視点に立った縄文時代の近江の姿に、アプローチし続けていきたい。

集成には各遺跡の報告書等を参考にして文末にその全てを記載したが、目を通していない文献については割愛した。本稿は考察の未熟な部分も多いが、湖東南部地域における縄文遺跡に関する問題提起はできたと思う。皆さんの御意見・御批判を頂ければ幸いである。今後も関連資料の集成・検討を続け、また他地域との比較により一層その内容の分析・把握に努め、数年先の近江全体の縄文遺跡の検討につなげていきたいと考えている。

準備・検討の段階で、同僚の中村健二氏や共同研究者である瀬口眞司氏、また鈴木康二氏・長田友也氏をはじめとする近江貝塚研究会会員各氏にご教示を得るところが多かった。さらに図版の作成に関しては同僚の大崎康文氏のご協力を得た。文末ながらここに記して感謝したい。

註

(1) 池田　碩・大橋　健・植村善博「滋賀県・近江盆地の地形」(『滋賀県自然誌』　(財)滋賀県自然保護財団　1991)

(2) 池田　碩・植村善博「八日市周辺の地形と地質」(『八日市市史』第1巻　八日市市史編さん委員会　1983)

(3) 早期以降の時期区分に関しては、平成9年12月に行なわれた土偶シンポジウム奈良大会で用いられた時期区分を用いた。

早期　前葉：ネガティブ押型文　中葉：通常の押型文　後葉：条痕文

前期　前葉：羽島下層Ⅰ式　中葉：羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式　後葉：北白川下層Ⅱb式～大歳山式

中期　前葉：鷹島式・船元Ⅰ式　中葉：船元Ⅱ・Ⅲ式　後葉：船元Ⅳ式～北白川C式

後期　前葉：中津式～北白川上層式Ⅱ期　中葉：北白川上層式Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式　後葉：元住吉山Ⅱ式・宮滝式

晩期　前葉：滋賀里Ⅰ・Ⅱ式　中葉：滋賀里Ⅲa式・篠原式　後葉：突帯文

(4) 愛知川左岸に立地する遺跡に比べ、右岸には鯰遺跡（愛知川町石橋所在・長野所在、縄文早期・中期後葉・晩期後半）と屋中寺廃寺遺跡（彦根市岡部所在、縄文晩期後半）の2遺跡しか、現在のところ確認されていない（本誌瀬口論文参照）。その差異を生み出す要因については、今後の課題である。

(5) 小林健太郎「蒲生町の地形環境」(『蒲生町史』第1巻　蒲生町史編纂委員会　1995)

(6) さらにいうならば、日野川が形成した氾濫平野から出土する縄文晩期後葉の痕跡は明確な遺構に伴うものはなく、3A群・3B群などから流されてきた可能性も考えられる。筆者が平成9年度に調査した辻野遺跡でも、縄文時代の所産と思われる石鏃3点（1点はチャート製、残り2点はサヌカイト製）が出土している。辻野遺跡が位置する近江八幡市安養寺町は、日野川左岸下流域の氾濫平野に立地しており、日野川の水害を最近まで受けてきた地域である。

引用文献一覧

各遺跡の内容については、以下の各文献によっており、この番号は表1の文献番号と一致する。また滋賀県教育委員会は「教委」に、(財)滋賀県文化財保護協会は「(財)県協会」に省略し、各市町村教育委員会については市町村名に「教委」を付した。市史・町史の編者については、市町村名に「史編纂（さん）委」を付した。

1．石原道洋「上日吉南遺跡・瓦屋寺カマエ遺跡発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(1)　八日市市教委　1981

2．石原道洋「内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(2)　八日市市教委　1983

3．石原道洋「八日市市内遺跡分布調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(3)　八日市市教委　1984

4．石原道洋「埋蔵文化財発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(4)　八日市市教委　1984

5．石原道洋「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(6)　八日市市教委　1985

6．石原道洋「埋蔵文化財発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(8)　八日市市教委　1987

7．石原道洋「下羽田遺跡発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告』(9)　八日市市教委　1989

8．岩崎直也「観学院遺跡発掘調査報告書」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告』(Ⅷ)　近江八幡市教委　1985

9．岩崎直也「出町遺跡（6・8次調査）」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告』ⅩⅦ　近江八幡市教委　1988

10．岩崎直也「後川遺跡　5次調査」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告』ⅩⅩⅢ　近江八幡市教委　1992

11．岩崎直也ほか「鷹飼遺跡」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告』(Ⅶ)　近江八幡市教委　1985

12．植田文雄「法堂寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第16集　能登川町教委　1990

13．植田文雄「今安楽寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第17集　能登川町教委　1990

14．植田文雄「柿堂遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第22集　能登川町教委　1991

15．植田文雄「柿堂遺跡（第3次）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第23集　能登川町教委　1992

16．植田文雄「正楽寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第40集　能登川町教委　1996

17. 植田文雄「斗西遺跡(5次調査)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第43集　能登川町教委　1997
18. 小江慶雄『琵琶湖底先史土器序説』学而堂書店　1950
19. 小江慶雄「琵琶湖地方の原初的文化の展開」『京都教育大学紀要ser.A』No.29　京都教育大学　1966
20. 小笠原好彦「農耕以前の文化」『蒲生町史』第1巻　蒲生町史編纂委　1995
21. 岡本武憲『ほ場整備報告』XⅣ－5県教委・㈶県協会　1987
22. 北川　浩「町内遺跡分布調査報告書」蒲生町文化財資料集』(2)　蒲生町教委　1985
23. 北原　治「上出A遺跡について　－山本川地区の調査－」『滋賀考古』第18号　滋賀考古学研究会　1997
24. 北原　治「滋賀県安土町上出A遺跡（山本川地点）の発掘調査」『古代文化』第50巻第1号　考古学協会　1997
25. 京都教育大学考古学研究会「考古学資料室所蔵の縄文時代遺物資料紹介」『史想』第22号　京都教育大学考古学研究会　1989
26. 小竹森直子「黒橋・八甲遺跡」『ほ場整備報告』XⅨ－6　県教委・㈶県協会　1992
27. 近藤　滋ほか『獅子鼻B遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1983
28. 斉藤博史「平塚・杉ノ木遺跡発掘調査報告書」『蒲生町文化財資料集』(15)　蒲生町教委　1992
29. 佐藤宗男・酒井和子「大中の湖西遺跡出土の縄文土器」『滋賀文化財だより』NO.3　㈶県協会　1977
30. 佐藤宗男「近江八幡市白王町大中の湖西遺跡出土の異形石器」『滋賀文化財だより』NO.107　㈶県協会　1985
31. 滋賀縣史蹟名勝天然記念物調査曾『滋賀縣史蹟名勝天然記念物概要』　1922
32. 滋賀県教委『平成3年度　滋賀県埋蔵文化財調査年報』　1993
33. 滋賀県教委『平成5年度　滋賀県埋蔵文化財調査年報』　1995
34. 滋賀県教委『平成6年度　滋賀県埋蔵文化財調査年報』　1996
35. 滋賀県教委『平成7年度　滋賀県埋蔵文化財調査年報』　1997
36. 滋賀県教委『平成7年度　滋賀県遺跡地図』　1996
37. 滋賀県教委・㈶県協会『琵琶湖岸・湖底遺跡分布調査概要』Ⅰ　1973
38. 滋賀県埋文センター『滋賀埋文ニュース』第175号　1994
39. 滋賀県埋文センター『滋賀埋文ニュース』第189号　1995
40. 滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江の縄文時代』　1984
41. 滋賀総合研究所『びわ湖と埋蔵文化財』　1984
42. 篠宮　正『ほ場整備報告』XⅢ－5　県教委・㈶県協会　1986
43. 島田貞彦「有史以前の近江」『滋賀縣史蹟調査報告』第1冊　滋賀縣　1928
44. 清水　尚『金剛寺遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　県教委・㈶県協会　1987
45. 杉浦隆支「法堂寺遺跡(第7次)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第37集　能登川町教委　1995
46. 杉浦隆支「法堂寺廃寺(1・2次)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第41集　能登川町教委　1997
47. 鈴木康二「上出A遺跡について　－蛇砂川地区の調査－」『滋賀考古』第18号　滋賀考古学研究会　1997
48. 角上寿行「黒橋遺跡」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告』XⅦ　近江八幡市教委　1995
49. 辻　広志ほか『ほ場整備報告』Ⅶ－5県教委・㈶県協会　1980
50. 田路正幸ほか『馬淵遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1991
51. 仲川　靖『ほ場整備報告』XⅣ－4　県教委・㈶県協会　1987
52. 中村健二「金剛寺・後川遺跡」(『ほ場整備報告』XⅨ－8　県教委・㈶県協会　1992
53. 奈良俊也ほか「市子遺跡・平塚遺跡」『ほ場整備報告』XⅦ－10　県教委・㈶県協会　1990
54. 西　邦和「林・石田遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第36集　能登川町教委　1995
55. 西　邦和「法堂寺遺跡(第6・8次)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第38集　能登川町教委　1996
56. 林　純『五個荘町埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ　五個荘町教委　1983
57. 林　純『一般国道8号線歩道敷設工事に伴う大郡遺跡発掘調査報告書』　県教委・五個荘町教委・㈶県協会　1983
58. 林　純『五個荘町埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅱ　五個荘町教委　1984
59. 林　純「木流遺跡・平阪遺跡」『五個荘町文化財発掘調査報告』4　五個荘町教委　1985
60. 林　純「五個荘町内遺跡分布調査報告書」『五個荘町文化財発掘調査報告』6　五個荘町教委　1986
61. 林　純「法源寺北遺跡・木流遺跡(第2次)」『五個荘町文化財発掘調査報告』8　五個荘町教委　1986
62. 林　純「三俣遺跡」『五個荘町文化財発掘調査報告』13　五個荘町教委　1986
63. 林　純「簗瀬遺跡」『五個荘町文化財発掘調査報告』23　五個荘町教委　1986
64. 林　純「新堂遺跡」『五個荘町文化財発掘調査報告』25　五個荘町教委　1993
65. 林　純「五個荘町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ」『五個荘町文化財発掘調査報告』27　五個荘町教委　1994

66. 林　純ほか「大郡遺跡発掘調査報告書」『五個荘町文化財発掘調査報告』7　五個荘町教委　1986
67. 林　博通ほか『五個荘町史』第4巻　五個荘町史編さん委　1993
68. 平井美典「金剛寺・後川遺跡」『ほ場整備報告』XⅧ－7　県教委・㈶県協会　1991
69. 藤岡謙二郎『先史地域及び都市地域の研究』　柳原書店　1970
70. 松沢　修ほか『ほ場整備報告』Ⅶ－2　県教委・㈶県協会　1979
71. 丸山竜平「古代のあけぼの」『八日市市史』第1巻　八日市市史編さん委　1983
72. 丸山竜平ほか「日吉・吉隅池遺跡発掘調査報告書」『かん排水報告』Ⅱ－2　県教委・八日市市教委・㈶県協会　1984
73. 造酒　豊「中屋遺跡」『かん排水報告』X－4　県教委・㈶県協会　1994
74. 水野正好「近江八幡市元水茎町遺跡調査概要」『滋賀県文化財調査概要』第2集　県教委　1966
75. 水野正好「滋賀県近江八幡市元水茎町遺跡調査概要」『日本考古学年報』18　日本考古学協会　1970
76. 三宅　弘ほか「常衛遺跡」『ほ場整備報告』XⅦ－8　県教委・㈶県協会　1990
77. 宮崎幹也『長命寺湖底遺跡発掘調査概要』県教委・㈶県協会　1984
78. 宮崎幹也「縄文晩期の丸木舟・櫂など出土」『滋賀文化財だより』86　㈶県協会　1983
79. 宮崎幹也「市子遺跡」『かん排水報告』V　県教委・㈶県協会　1988
80. 宮崎幹也「麻生遺跡」『ほ場整備報告』XⅥ－4　県教委・㈶県協会　1989
81. 山本一博『三敷前遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会・能登川町教委　1983
82. 山本一博「善教寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第1集　能登川町教委　1985
83. 山本一博「千里遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第4集　能登川町教委　1985
84. 山本一博「柿堂遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第8集　能登川町教委　1987
85. 山本一博「掛樋遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第14集　能登川町教委　1990
86. 山本一博「林遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第18集　能登川町教委　1990
87. 山本一博「高岸遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第29集　能登川町教委　1993
88. 山本一博ほか「町内遺跡分布調査報告書」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第3集　能登川町教委　1986
89. 山本一博ほか「今安楽寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第5集　能登川町教委　1986
90. 横田洋三「五斗井遺跡・太田氏館遺跡・宮ノ後遺跡」『ほ場整備報告』XⅧ－5　県教委・㈶県協会　1991
91. 横山浩一ほか『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部　京都大学文学部　1960

(50音順)

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年３月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は２段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。　（K．O）

平成10年３月

紀　要　第１１号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923　K
滋賀県文化財
保護協会蔵書印　440